

博士論文要旨

論文題名：焦竑思想の研究

立命館大学大学院文学研究科
人文学専攻博士課程後期課程
コウ ソウ
HUANG Zheng

本研究は、晩明思想の源流を基点とし、晩明の思想家である焦竑の思想の構成とその思想の背景について再考し、晩明思想の文脈が形成される時期におけるその構成要因について調査と分析を行った。本論で検討する思想史上の問題とは、晩明思想コンテクストの範囲と形態、およびその特性について明らかにし、それを通じて、晩明思想に関する問題を再区分し、定義することである。上記の問題についての具体的な研究を試みるにあたって、三つの問題を取り上げた。まず一つ目は、晩明思想の範囲を定義する「晩明の思想」と「思想の晩明」についてである。二つ目は、晩明思想の形態を分類する「執拗な低音」と「消散した響流」についてである。三つ目は、晩明思想の表現上の特性をまとめた「晩明思想の群体性」と「晩明思想の個性性」についての問題である。上記の三つの問題の検討を通じて、これらが晩明思想のコンテクストを定義する鍵となることを明らかにした。そして本論ではさらに、晩明思想の区分と定義、晩明と清初期における思想の存続状態、晩明思想の起源といった問題についての調査と整理を通じて、完全な晩明思想コンテクスト思想コンテクストを構築することを試みた。

晩明思想史に関する問題を取りあつた先行研究においても、焦竑が晩明思想コンテクストの中において占める重要性については早くから注目されていた。これまでは焦竑思想の一部分について検討した研究は多く見られたものの、その全体にわたる専門的な研究は決して多くなかった。さらに、焦竑思想の個性性は晩明思想コンテクストの中いかに位置づけられるのかという問題や、それに関連する思想の問題などについて、完全に整理を行った研究はなされてこなかった。焦竑思想の持つ学術的な価値、および当時の思想コンテクストにもたらした大きな影響力は画期的なものであり、焦竑という個体思想によって晩明思想コンテクストが始動したとも言えるのである。

本論の各章では、焦竑の生涯における経歴の順に、晩明思想コンテクストの構成要項について、以下のように論を展開した。

第一章では、焦竑の生前から 16 歳までの時期を中心に、彼の戸籍身分と幼年期に受けた啓蒙教育が個体思想の形成に与えた影響を調査し、明代の軍籍士人の持つ思想群体性の構成について分析した。さらにそれらを通じて、晩明思想コンテクストの中に形成された思想個体の思想群体性の背景について分析を加えた。

第二章では、焦竑の 16 歳から 23 歳の時期、すなわち彼が南京の寺院において学んだ時期において、彼の中に芽生えた仏道思想に対する最初期の認識について分析し、晩明の江南の仏教寺院における思想の共生性について明らかにした。当時の南京の仏教寺院における思想伝播の様相を通じて、晩明思想コンテクストの中に存在する思想の共有性について論じた。

第三章では、焦竑の 23 歳から 50 歳の時期において、彼が南京において科挙の受験と陽明学の学習にいそむ場となった書院での思想受容の過程について調査し、さらに晩明の江南の書院の持つ思想媒体の発生場としての性質について明らかにした。そして、晩明思

想コンテキストの中において、江南地方の書院は晩明思想の思想キャリアとしての役割を備えていることを述べ、書院の持つ思想の伝播機能について論じた。

第四章では、焦竑の 50 歳から 60 歳までの時期を取り上げ、彼が北京に出仕していた期間における政治活動と、その時期の彼の思想について考察するとともに、晩明における士人思想の世俗化の様相を明らかにした。それによって、晩明思想コンテキストの中における、思想の伝播を担ったメディアとその伝播の経路を解き明かし、晩明思想の伝播に伴って顕著となっていた世俗化の傾向について論じた。

第五章では、焦竑が致仕した後の 60 歳から 81 歳の時期における、三教合一思想と西学思想の形成過程について分析した。そしてさらに、晩明思想コンテキストにおける思想個体の持つ融合性と創造力について論じ、晩明思想の転換期において西学から受容した部分について解き明かした。

第六章では、焦竑没後に、焦竑思想が後世において受けた評価、および後世に対して与えた影響について調査し、同時に晩明思想史研究における系図的思想区分に関する問題について検討した。さらにそこから、晩明思想コンテキストの中における思想の系譜的問題について議論し、晩明思想の中における個性性思想の存在状態を述べた。

上記の研究を通じて、晩明思想コンテキストにおける焦竑思想の位置と役割について、より全面的に整理し明らかにした。